

編 集 後 記

2012年10月8日、ノーベル生理学・医学賞が京都大学iPS細胞研究所長山中伸弥教授に授与されることが決定し、国内外で大々的に報じられた。今回のノーベル賞獲得は素晴らしい偉業達成であり、まさに快挙であり、日本人としてまた、医学研究に携わる人間として、実に喜ばしい。この人工多能性幹細胞（iPS細胞）は、多くの神経変性疾患をはじめとする神経難病と闘っているわれわれ神経内科医にとっては、根治療法 disease modifying therapy の実現の可能性を切り開く画期的な研究であるといえる。今後の、早期臨床応用への実現をめざし、iPS細胞研究のますますの発展を祈りたい。

さて、伝えるところによる山中伸弥教授のプロフィールを拝見すると、医学部卒業後は整形外科医を志して臨床研修に入りその後、思うところあって臨床を離れ、胚性幹細胞（ES細胞）の基礎研究の道に進み米国に留学し、帰国後ES細胞から一歩進み倫理的問題を克服しうるiPS細胞の樹立に邁進されている。基礎研究の道に進まれた後の、本賞受賞までの努力は筆舌に尽くしがたい苦勞の連続であったことと推察される。

日本神経学会の会員は95%以上が臨床医であり、多くの会員は日々の臨床のかたわら基礎医学あるいは臨床医学研究に従事しておられるであろうと思われる。研究に集中しうる時間は、と私自身の場合を考えてみると、臨床、教育あるいは組織の管理などに費やされる時間を差し引くと、実に驚くほどの短時間であることがわかる。費やす時間が潤沢にあれば素晴らしい研究ができるかどうかは、もちろん議論のあるところであるが、やはり、臨床医にとっての研究は時間的にかなり制約された厳しい環境のもとで行われていると言わざるを得ない。基礎系研究者にとっても臨床系研究者にとっても「自分の研究を進展させて多くの患者を救いたい」という最終目標は同じである。昼夜を徹し寝食を忘れて研究に取り組む若い臨床系の大学院生の一途な姿を間近に見ていると、臨床医にとっての研究の在り方、臨床医の研究に対する社会の受け入れ方など、熟考し解決しなければならない課題が山積していることに改めて気づかされる。

(鈴木則宏)

〈編 集 委 員〉

編集委員長 中野 今治 編集副委員長 阿部 康二 鈴木 則宏
 編集委員 神田 隆 木村 和美 桑原 聡 瀧山 嘉久 野村 恭一 森 悦朗
 編集委員（幹事兼任） 清水 潤 森 秀生 吉井 文均

「臨床神経学」 第53巻 第1号 平成25年1月1日発行
 編 集 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発 行 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 水 澤 英 洋
 印 刷 所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷 株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>